

「魅力ある学会誌」のための紙面作り：学会誌の変遷と不易を踏まえて

今回、皆様のお手元に届いている土木学会誌は、第92巻（Vol. 92）です。この“92”という数字は、そのまま、土木学会誌には92年の歴史がある、ということを示しています。90年以上前と言えば大正時代、それは恐慌や大震災や大正デモクラシーの時代であると同時に、先の大戦のまたその前の大戦の時代でもあります。そう考えますと、その間に社会における土木学会の位置づけも大きく変わって来たことは間違いありません。そしてそれに伴って、土木学会誌も大きくその姿を変えて参りました。しかし、何事にも流行と不易が、つまり、変わるものと変わらないものがある様に、土木学会誌にも変わるもの、変わらないものがあることもまた事実です。

ここで、土木学会誌における変わらぬもの（不易）とは一体何なのでしょう。それにはいろいろな考え方があるかもしれませんが、一番確かなのはその「名」、つまり「土木学会誌」という言葉そのものでありましょう。言うまでもなく、土木学会誌という言葉は土木学会の雑誌であることを意味しています。したがって、土木学会誌の不易とは何かを考える鍵は土木学会とはそもそも何であるのかという問いの中に隠されています。

土木学会の定款によりますと、その中には学会の目的が次のように記述されています、「土木工学の進歩および土木事業の発達ならびに土木技術者の資質向上を図り、もって学術文化の進展と社会の発展に寄与する」。この文章は、土木学会は、技術水準と技術者の資質の向上を図り、それを通じて「社会に資する」ことを目的としている学会であることを示しています。ここで、土木学会には講演会や論文集発行等の様々な活動がなされていることを鑑みますと、会員各位に向けて発行される学会誌は、「技術者の資質向上」を主たる目的とし、それを通じて社会に資する役割を担っていると言うことでできるでしょう。おそらくはこの点こそ、土木学会誌の「不易」なのだと考えられます。

ところで、技術者の資質向上を図りそれを通じて社会に資するためには、どのような雑誌作りが求められているのでしょうか。おそらくこれこそ、時代の流れを読み取りながら、その時々で考えていかなければならない問題ではないでしょうか。ただし、その時に忘れてはならないのは、「多くの土木技術者が読む」という紙面作りを目指すことではないかと考えられます。有益な情報を満載した雑誌をいくら作ったとしても、もし仮にそれが「誰も読まない雑誌」であるなら、土木学会誌の役割を果たすことなど望むべくもありません。

そのためにも、土木学会誌においては、その内容の水準は言うに及ばず、その「紙面作り / デザイン」にも配慮することが重要となります。こうした認識から、天野現委員長を中心とした編集委員会の現編集方針の一つとして「読みやすい紙面作り」が掲げられている次第であります。

この様に、学会誌の紙面作り / デザインにおいて「読みやすさ」は重要な要素となるのですが、その一方で「分かりやすければ何でもよい」という態度が許されるとも考えられません。なぜなら先にも指摘したように、学会誌は「社会に資する」ことを大きな目標としているからです。この点を踏まえ、学会誌の紙面づくり / デザインにおいて求められているのは、分かりやすさと共に一定の品位を求めていく姿勢なのだと言うことができでしょう。こうした考え方のもと、現在土木学会誌では、2008年の1月までの期間を目処として、「読みやすく、品位あるデザイン」を求めた検討を進めているところです。

ところで、学会誌の記事には横書きがふさわしい「情報の伝達」を旨とするものがある一方で、我々の言語が縦書きの長い歴史を持つ日本語である以上、「読みやすく、品位あるデザイン」を考えるにあたっては、縦書きの可能性を検討することを、視野に納めていかざるを得ないのではないかと感じております。特に、かつて学会誌は「論文集」の機能も併せ持っていましたが、数十年前にその機能が学会誌から「分離」し、別の雑誌として土木学会論文集が発行されるようになって以来、学会誌の役割が大きく変化しています。こうした学会誌の役割の変化を踏まえることも、そのデザインを考えるにあたって重要な視点となるものと考えられます。

いずれにしても、天野現委員長を中心とした現編集委員会では、読者の皆様に元気を出して頂けるような学会誌を、そして、社会に資するよりよい土木の仕事のために、だれもが、毎号、読んでいるような、学会誌を目指したいと考えております。そしてその一環として、「読みやすく、品位あるデザイン」を求める議論を続けて参りたいと考えております。読者の皆様におかれましても、是非、今月号の学会誌からはじまる一部の記事の縦書き化などの取り組み等をご覧いただきつつ、学会誌の紙面あり方などについてご意見を頂ければ、大変有り難いものと考えております。どうぞ、よろしく願いいたします。